

『十六夜日記』における『源氏物語』摂取のあり方

玉 木 な つ め

一 はじめに

『十六夜日記』は、鎌倉時代を代表する日記・紀行文として知られる。作者阿仏尼は、建治元（一二七五）年に夫・藤原為家が没した後、その遺産の一つ播磨国細川庄の相続に関し、為家とその前妻・進生女の子の為氏と争う。そして弘安二（一二七九）年一〇月一六日、幕府への訴訟のため、鎌倉へ出発した。本作品はこの下向及び鎌倉での様子を記したものである。末尾に付された鶴岡八幡宮への勝訴祈願の長歌を除いた本文は、旅立つ経緯や、出立前の出来事や述懐、そして鎌倉への旅を綴る前半部分と、鎌倉滞在を記した後半部分とに分けられる。前半部は「路次の記」、「道の記」、「旅の記」などと呼ばれ、後半部は「東日記」とも呼ばれる。また、前半部に関しては、冒頭から「さのみ心弱くてもいかがとて、つれなくふり捨てつ。」までを「序」とし、それ以降の紀行と分ける考え方もある。本稿では、便宜上『十六夜日記』本文を三つに分け、冒頭から出発までを「序」、紀行部分を「路次の記」、鎌倉に着いて以降を「東日記」として扱う。

二 『十六夜日記』における『源氏物語』摂取

阿仏尼の著作には、『源氏物語』の影響が多く指摘される。「うたたね」はその代表的なもので、例えば、田淵句美子氏は、「全編『源氏物語』に彩られたような作品」と述べる。また、同氏は、為家没後五七日の法要の願文『阿仏假名諷誦』についても、『源氏物語』の表現的影響が色濃く見られる」と指摘する。また、岩佐美代子氏は、『阿仏の文』の文章表現について、「……古典を縦横に引き、特に『源氏物語』はきわめてよく消化された、細部にまで通曉した引用ぶり」と評する。

では、『十六夜日記』はどうか。『源氏物語』摂取については、諸注釈書において数箇所の指摘はなされている。しかし、これまで特に詳しく論じられることはなかったようだ。本論文では、諸注釈書で指摘のある箇所について、その妥当性や、摂取の方法等について考察していく。なお、取りあげる順は、基本的に『十六夜日記』の進行に沿っている。

① いさよふ月——十六夜の月

最初に見るのは、「序」及び「東日記」の二箇所で、『源氏物語』の同一の文章を引いているとされる部分である。これについて、まずは「序」、次に「東日記」の順で、先行の見解を紹介しながら考察を加える。

以下に『源氏物語』から該当部を示す。

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくたまふほど、にはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。そのわたりに近きなにがしの院におはしまし着きて、……

これは、夕顔巻で、源氏が夕顔を「なにがしの院」へ連れて行く場面の叙述である。誘いに乗ることをためらう夕顔を、源氏はあれこれと説得し、ついには彼女を連れ出してしまふ。

次に、『十六夜日記』「序」より、問題の箇所を引く。阿仏尼が下向の決意を記した部分である。

……ゆくりもなく、いさよふ月に誘はれ出でなむとぞ思ひなりぬ。

「いさよふ月」「ゆくりなく」という語が、夕顔巻「いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ」と共通し、文章の雰囲気もよく似ている。阿仏尼が、意識的にこのように記しているとは見て間違いないだろう。森本元子氏は、この表現について、次のように述べている。³

夕顔の巻で、女（夕顔）は、「ゆくりなくあくがれんこと」をためらっていたのだが、この日記では逆に、「さそはれ」出ることを決意している。しかも出発は、後述のように十月十六日。ここで「ゆくりもなく」は、偶然にもという意を強調して、十六夜の月に重ねられる。つまり、夕顔の巻の叙述にそっくりならうごとく見せながら、同じ語句や似た語句を、都合よく事件の進展に用い、たちまち夕顔を離れてしまふ、まったく巧妙なやり口である。

阿仏尼は、夕顔巻の語句や表現を文中に取り入れながらも、その物語世界には同化せず、自身の現実を客観的に描き出すのに利用する。森本氏はその巧みさを指摘しているのである。

さて、先の「序」の引用部以降を見ると、以下のようになっている。

……身を要なきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよ

ふ月に誘はれ出でなむと思ひなりぬる。さりとて、^⑤文屋の康秀が誘ふにもあらず、^⑥行くべき国求むるにもあらず。

古典からの引用が指摘される箇所に、私に線と番号を付した。順に、榛線部①は『伊勢物語』第九段、②は先に考察した『源氏物語』夕顔巻、③は文屋の康秀と小野小町のお話、そして、④に再度『伊勢物語』第九段を引いている。『源氏物語』だけではなく、漂泊する人物を描く他の作品に拠った表現を組み合わせ、構成された文章なのである。

その前半では古典を響かせながら、いかにも流離の旅に出るかのような書き方をしている。しかし、森本氏が指摘するように、阿仏尼は夕顔の女のようにためらうのではなく、自ら「さそはれ」出ることを決意する。更に、「さりとて」以下では、自分の旅は誰かに言われたからでも都に居場所を無くしたからでもない、己の使命を果たすために自ら決意したのだ、と主張している。「序」においては、夕顔巻をはじめとした複数の古典を引きつつも、その世界に入り込むのではなく、自らを客体視する姿勢を保っていると言えよう。

次に、「東日記」を見る。ここでは、阿仏尼が鎌倉に着いた後、都の人々と交わした贈答歌が主に記されている。夕顔巻を引くと指摘されるのは、その最初にあたる部分である。

……宇津の山にて行きあひたりし山伏のたよりに、ことづて申したりし人の御もとより、……

ゆくりなくあくがれ出でし十六夜の月やおくれぬ形見なるべき

都を出でし事は神無月の十六日なりしかば、いさよふ月を思し忘れざりけるにや、いと優しくあはれにて、ただこの御返事ばかりをぞ、又聞ゆる。

めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく空にうかれし十六夜の月

ここでも、「ゆくりなく」「あくがれ出でし」「十六夜の月」等、語句や表現の仕方が、前掲の夕顔巻の文章とよく一致する。『源氏物語』摂取と見ることに疑問は無い。

贈答の相手については、阿仏尼の娘というのが現在の通説である。後深草院の皇女を生んだ女性で、為相や為守の父違いの姉に当る。この娘との贈答について、岩佐氏は次のように述べる。⁷

日記本文には示されていないが、おそらく阿仏尼は出発に当り、「ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ」というような言葉を含む歌を女に残したと思われる。この一連の贈答はこれをふまえてのものであろう。

地の文を見ると、「いさよふ月を思し忘れざりけるにや」と書いている。これは、出立する前のやり取りを娘がしっかりと覚えていて、その返しを贈って来たことに、驚き感動したからこそその書き方のように感じられる。岩佐氏の見解に賛同したい。

この贈答は、確かに夕顔巻を引いている。しかし、娘が詠み贈った歌は、そこに夕顔の女の運命を響かせているように感じられない。阿仏尼の返歌も同様である。物語の世界から離れ、贈答上の表現として、かつて阿仏尼の用いた言葉に応用したものと見られる。

以上、「序」と「東日記」において、『源氏物語』夕顔巻の摂取の様相について見てきた。「序」においては、表現に夕顔巻をはじめ複数の古典の世界を織り交ぜ、そこに自身を重ねるかのように見せかける。しかしその中身は、この旅は当てのないものではなく、己の意思で決めた、使命を果たすためのものだという主張である。「東日記」では、贈答の核になる表現として夕顔巻の語句を取り入れており、その物語世界を強く響かせるものではない。共通するのは、物語由来の語句を用いながらも、その世界から離れたところに、自らの表現を組み立てていることである。森本氏の言葉を借りれば、「まったく巧妙なやり口」と言えよう。

②枕の塵

次に考察するのは、「序」において、都を發つ前の阿仏尼が、

ふと亡き夫との寢室を見やる場面である。ここでは、先行の指摘について検討した後、私見を述べたい。

まずは、「序」より該当部分を示す。

……関のうちを見やれば、昔の枕さながら変らぬを見るも、
今更悲しくて、傍らに書きつく。

とどめおく古き枕の塵をだに我が立ち去らば誰か払はむ

寢室に、亡き為家の枕が昔と変わらずに置いてあるのを見た阿仏尼は、「私が鎌倉へ旅立ち、屋敷から去った後は、一体誰が主無きこの枕に積もる塵を払うというのか」と、出發の悲しみを詠む。この和歌について、武田孝氏は、『大和物語』の歌

しきかへずありしながらに草枕ちりのみぞあるはらふ人なみ

(百四十段)

に基づくと見ると同時に、『源氏物語』の歌

君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

(葵巻・源氏)

も阿仏尼の念頭にあったのではないかと推察している。また、福

田秀一氏も、「大和物語一四〇段や源氏物語・葵などを踏まえるか。」と、類似の見解を示す。

『大和物語』の歌は、宮（元良親王）の夜離れを女（源昇女）がなじったものである。女のもとへ通わない期間が長くなった宮が、「私がかつて寝た」あの廂の間に敷かれた床は、そのままで、片付けてしまいましたか」と問うた所、女は、「あの時のままですが、塵ばかりたまっています。それを払って寝る人がおいでにならないので」と詠んで返す。

『源氏物語』の方は、葵上の死後、「長恨歌」を引いた一節「霜華白し」に寄せる形で、源氏が書き付けた歌である。妻亡き後、使う者がおらず塵が積もってしまった床に、自分は幾夜も涙を払いながら一人寝を重ねるのだらう、と詠み、彼女の死を嘆く。なお、同場面には、やはり「長恨歌」に基づいた一節「旧き枕故き衾、誰と共にか」に源氏が添えた「亡き魂ぞいと悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに」という歌も見える。亡き人と共寝した床を離れがたく思うが、それにしてもその人の魂はどんなにか悲しい思いであつただらう、と、こちらにも床に執して亡き妻の死を悼む。

他方、森本氏及び岩佐氏は、

塵積る古き枕を形見にて見るも悲しき床の上かな

（『狭衣物語』・狭衣）

を参考に引く。これは、出家した女二の宮を思つて狭衣が詠んだ歌である。未婚の皇女であつた女二の宮は、不本意な形で狭衣と契り、若宮を身ごもる。懷妊を知つた乳母たちや母大宮は、世間体を憚り、それを大宮の子と偽つて公表、大宮は若宮誕生を見届けた後、まもなく亡くなる。狭衣は大宮死去後に事情を悟るが、心痛極まつた女二の宮は出家してしまふ。狭衣は、真相を隠したまま、女二の宮の形見である若宮の後見を務める。しかし、彼女への慕情が断ち切れず、絵日記に添えて右の和歌を贈る。だが、女二の宮は冷淡な態度を貫き、若宮へも関心を示さない。

『大和物語』の歌は、他に指摘されている歌に比べると、詠歌の状況や、用いられている語など、阿仏尼の歌と重なる要素が少ない。阿仏尼詠が、特別これに基づいているとは断じ難いように感じられる。ただ、この女の歌ではなく、宮が「かの廂にしかれたりし物は、さながらありや」とりたてやしたまひてし」と問うた言葉の、特に「さながらありや」の部分が、『十六夜日記』の地の文「昔の枕さながら変らぬ」に釋している可能性はある。

源氏の歌は、伴侶亡きあと、悲しみを抱えつつ一人寝をする様子を詠んだもので、これは、夫を亡くした阿仏尼にも通じる。「自分がこの家を離れた後は、枕の塵を一体誰が払うというのか」という阿仏尼の詠み方は、塵を払いながら一人寝をする、という源氏詠と連続性があるようにも捉え得る。また、同場面でも、同じく

「長恨歌」の一節「旧き枕故き衾 誰と共にか」に寄せた源氏の歌「亡き魂ぞ」も、亡き伴侶との床を離れがたく思うことや、「悲し」という語など、「十六夜日記」に通じるものがある。葵上追憶の場面全体が、阿仏尼の念頭にあったと考えて良いだろう。

『狭衣物語』を見ると、「古き枕」が相手を偲ぶ「形見」であること、それを見て「悲し」とすることなどが、『十六夜日記』の叙述や歌と共通する。配偶者の生死を別にとすると、内容的にはかなり近い印象がある。これもまた、阿仏尼は取り入れていると見られる。

これらの他にも、これまで『十六夜日記』との関わりは特に指摘されていないが、『建礼門院右京大夫集』に、注意が引かれる歌がある。同集第四十一段に、「小松の大臣失せたまひてのち、その北の方の門へ、十月ばかり聞こゆ。」とあり、右京大夫が故内大臣平重盛の北の方へ贈った歌二首と、北の方が返した二首が示されているが、この度注目するのは、その贈答のうちの一组である。

とまるらむ古き枕に塵はゐて払ぬ床を思ひこそやれ

（建礼門院右京大夫・一〇四）

磨きこし玉の夜床に塵積みて古き枕を見るぞ悲しき

（平重盛の北の方・一〇六）

右京大夫は、北の方がそのまま残しているであろう、重盛の形見である枕に塵が積もり、それを払いもしない床の様子が察せられます、と詠む。対して北の方は、往時は磨き上げていた立派な寝床に塵が積もり、そこに夫の枕が以前のままあるのを見るのは悲しいことです、と返す。

右京大夫は、父に『源氏物語』現存最古の注釈書『源氏釈』を著した世尊寺伊行を持ち、自身も『源氏物語』に通じていたことが知られる。そんな彼女の贈歌「とまるらむ」は、前述の葵巻の影響を受けている。そして、その歌の内容や、言葉の選振等が、阿仏尼の歌「とどめおく」に重なるのである。また、返歌下句「古き枕を見るぞ悲しき」は、『十六夜日記』地の文「昔の枕さながらに寝らぬを見るも、今更悲しくて」に通じる。そして、ここでの「古き枕」が亡夫のものだということは重要だろう。阿仏尼の状況と近似しており、他の歌には無い点である。

右京大夫は、御子左家と関わりのあった女性である。¹²『建礼門院右京大夫集』は、『新勅撰和歌集』の撰歌資料として、定家が

右京大夫に詠草を求めたことが成立の背景にある。¹³また、同集には建仁三（一二〇三）年後鳥羽院が主催した俊成の九十の賀についての記事があるが、それによると、後鳥羽院から俊成へ下賜される袈裟に右京大夫が刺繍し、祝宴にも伺候した。そして、後日、彼女は俊成本人とも歌を交わしたという。¹⁴

右京大夫の歌は、『新勅撰和歌集』に二首採られた後、やや時

代を経て、為家の孫にあたる京極為兼撰『玉葉和歌集』に十首採入される。『建礼門院右京大夫集』が、定家から為家へ、為家から為兼へと伝わった可能性は考えられよう。つまり、阿仏尼がこの集を見ていたことも有り得る。『源氏釈』で知られた世尊寺伊行の娘で、自身も『源氏物語』の確かな教養を備えていた上、俊成、定家との交流もあった女性歌人の詠草に、阿仏尼は興味を持って目を通したのではないか。

以上、阿仏尼の「枕の塵」を用いた歌とそれに関する地の文について、指摘のあった『大和物語』、『源氏物語』、『狭衣物語』の歌を中心に考察した後、『建礼門院右京大夫集』との関連の可能性を指摘した。出辺麻友美氏は、この阿仏尼詠について、「阿仏尼の『長恨歌』ひいては『源氏物語』への深い知識を示す一例」と捉える。確かに、葵巻に引かれた「長恨歌」の一節自体を阿仏尼は承知していただろうが、それそのものではなく、それを下敷きにした『源氏物語』葵巻の源氏詠や、他の作品における似た場面、詠歌へ意識が働いているように感じられる。『源氏物語』を中心に、「枕の塵」に関わる他の物語や歌を重ねながら、この部分を著しているのではないだろうか。

③月の都

ここからは「路次の記」の記事になる。まず、三河国の渡津駅を発つ、次の場面から見ていく。従来の説の妥当性を検討した後、

それとは少し別の角度から考察を加えたい。

廿二日の暁、夜深き有明の影に出でて行く。いつよりも、物いと悲し。

住みわびて月の都は出でしかど憂き身離れぬ有明の影
とぞ思ひ続ける。

和歌の、「住み」には「月」の縁語「澄み」が響く。「月の都」は都の美称で、下句「有明の影」に対応している。

「月の都」を都の美称として用いている参考歌として、『源氏物語』須磨巻における源氏の歌があげられている。

見るほどぞしばしなくさむめぐりあはん月の都は遥かなれども

これは、月の美しい八月十五夜に、須磨の地にいる源氏が詠んだものである。都での日々や人々を思い出し、「よよと泣かれたまふ」源氏だが、月を眺めている間だけはしばらく心が和らぐ、と詠う。「月の都は遥かなれども」と表現することによって、都と源氏との空間的な距離が強調される。また、この歌やそれに関わる部分には、『竹取物語』の影響が指摘されている。¹⁶⁾

以上を踏まえ、阿仏尼歌を見る。これは、旅の七日目に詠まれ

ている。「月の都」という表現には、都との距離的な隔たりも反映されていると考えて良いだろう。都の美称として「月の都」を用い、さらに距離的な隔たりを表現する詠み方は、他に例を見ない。阿仏尼は、源氏詠を意識しながら、「住みわびて」の歌を詠んだと考えていいだろう。

また、一首全体の表現をよく見ると、「源氏物語」以外の要素も感じられる詠みぶりである。まず、「住みわびて」都を出たと詠んでいる。この詠み方からは、「伊勢物語」第九段冒頭で、「京にはあらじ」と都を発った《昔男》が想起される。また、小野小町の「侘びぬれば……」という著名な歌も浮かんで来よう。阿仏尼の実際の旅の動機は、京に「住みわび」たからという訳ではないことは、「序」に明らかにされているが、ここでは古の人物の流離を脳裏に置き、このように詠んだのではないか。また、二句及び三句「月の都は出でしかど」で浮かんでくるのは、かぐや姫である。「源氏物語」が踏襲している「竹取物語」をも、阿仏尼はここに響かせていると捉えられる。物語の享受関係をよく心得ていたことがうかがわれよう。

以上、「月の都」の『源氏物語』撰取について検討に加え、別の古典からの影響について考えた。阿仏尼は、『源氏物語』のみならず、それに先行する古典の貴種流離のイメージを数多重ね、「住みわびて月の都は出でしかど」と詠んでいることが分かる。「いつよりも、ものいと悲し」という気分が、これらの流浪する

物語の登場人物たちを思い起こさせたのかもしれない。

しかしその後、月傘がかかった様子を見て「月も笠をかぶっている」と言ったお供の言葉に反応し、「旅人の同じ道にや出でつらん笠うち着たる有明の月」と、詠諧歌的に詠む。流離を描く物語を重ねた歌と、現実の景に興を感じ、諧謔味を加えた歌が連続しているのである。自分の悲運にとらわれるだけではなく、現在の状況に面白さを見出す、阿仏尼の余裕が感じられる。彼女は、物語に自身を投影してその世界に浸りきるのではなく、そこから一步距離を置いて、現実を客観視する冷静さを持っているのである。

④さしかへる、ひまもなし

次に見るのは、天中川（天竜川）の渡し場の記述である。ひっそりなしに往復を繰り返す渡し舟の様子に、阿仏尼は、はかないこの世のあり方を見る。この部分における先行の指摘に基づきながら、より細かく考察していく。

廿三日、天中の渡りといふ。……組み合せたる舟ただ一つにて、多くの人の往来に、さしかへる、ひまもなし。

水の泡のうき世を渡る程を見よ早瀬の瀬々に棹も休めず

この「さしかへる」について、森本氏は、『源氏物語』橋姫

巻より、次の歌を紹介する。

さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつらん

(大君)

これは、薫が「橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる」と詠み贈ったのに対する、大君の返歌である。

この大君詠に拠って詠まれた歌は何首かあるが、新古今時代以前には見出せない。定家以後の流行との指摘がある。定家、そして為家にも、大君の歌を下敷きにした歌があるので、参考としてそれらを示す。

さしかへる宇治の川長袖ぬれてしづくのほかにほらふ白雪

【定家全歌集】三〇七五

さしかへるしづくも袖の影なれば月になれたる宇治のかはおさ

(「為家卿集」九、「中院詠草」五〇、

【新後拾遺集】秋下・三八五、【為家全歌集】六九)

定家の歌は、建久二(一一九二)年、定家が三十歳の時の作である。為家の歌は、承久二(一二二〇)年、二十三歳の折の、一遣

助法親王家五十首」題に基づいた私詠である。

この歌も定家詠も、「さしかへる」、「宇治の川長」、「しづく」を用いており、これが大君の歌と強く結びつく要素となる。「十六夜日記」を見ると、地の文に「さしかへる」がある。「川長」という語は見られないが、歌に「棹も休めず」とあるので、「川長」と同じく舟を渡す人の存在は暗示されている。「さしかへる」という語自体が珍しいものであるし、阿仏尼は、定家、為家ほど明らかな撰取は行っていないものの、大君の歌を念頭に置いていると見ていいだろう。詠み方に異なる部分はあるが、大君詠を取り入れた定家、為家の先例に倣う意識もあるのではないか。

さて、この「天中の渡り」の記述を考えるにあたっては、先の大君の歌だけではなく、薫が「橋姫の」と詠み贈る直前の、次の叙述が重要だと感じられる。

あやしき舟ともに柴刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに行きかふさまども、はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じことなる世の常なさなり。

薫は、行き交う舟がはかない水の上に浮かんでいる様子に、無常の世の姿を見出す。水に浮かぶ泡の有様に、世の中や人生の無常を見る思想は、「ここに消えかしここに結ぶ水の泡うき世にめぐる身にこそありけれ」【千載和歌集】釈教歌・一二〇二・藤原公任)

や、鴨長明『方丈記』冒頭に表されている。一方蕉は、日々を當む自分の低い者たちの舟が、はかない水の上に浮かんで行き交う様子に目を留め、そこに無常を見出す。前者と後者はやや発想を異にしているのである。

阿仏尼の表現を見ると、後者、すなわち蕉の見方に近い。歌の初句こそ「水の泡の」だが、「うき世を渡る」「棹も休めず」という語や、地の文における舟の描写から、この部分の中心は水上の舟ということが分かる。地の文「多くの人の往来」は、橋姫巻の「おのおの……行きかふさま」に通じよう。過去に指摘は無いが、ここでの『十六夜日記』の詠歌は、蕉の無常観にも基づいていると考えられる。

橋姫巻から直接摂取り入れるのは、大君詠中の「さしかへる」一語に留め、和歌ではなく地の文に配する。そして、「川長」にあたる存在は、歌中に暗示する。さらに、大君の歌のみならず、その前に示された蕉の無常観をも取り込み、詠出しているのである。『源氏物語』の複数の要素を、非常に巧みに織り込んだ部分と言えよう。

⑤ 波ただ枕に立ちさわぐ

次に考察するのは、清見が関を越えた辺りで、海に近い場所に宿を取った際の記事である。ここでは、先行の指摘をより深く掘り下げて考える。

暮れかかる程、清見が関を過ぐ。……程なく暮れて、そのわたりの海近き里にとどまりぬ。……夜もすがら風いと荒れて、波ただ枕に立ちさわぐ。

ならはずよそに聞きこし清見濁荒磯波のかかる寝覚は地の文の「波ただ枕に立ちさわぐ」という表現について、武田氏は、『源氏物語』須磨巻の以下の場面を踏まえているのではないかと述べる。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦浪、夜々はげにいと近く聞こえて、……独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここともに立ちくる心地して、……

須磨の浦では、打ち寄せる波の音が、夜は殊に間近く聞こえる。ある夜、寝られないでいる源氏が耳を澄ませると、本当に近くまで波が迫ってくるように感じられる。この部分が、阿仏尼の表現の本説であるという。

興味深いことに、他の中世の作品にも、阿仏尼の「波ただ枕に立ちさわぐ」に類似する表現は散見される。

伊豆の山に留まり侍るに、波の音枕に近くて、寢覚がちなれば、……

〔信生法師日記〕

この関（清見が関——稿者注）還からぬほどに、興津といふ浦あり。海にむかひたる家に宿りてとまりたれば、磯辺によする波の音も身のうへにかかるやうに覚えて、夜もすがら寝ねられず。

〔東関紀行〕

海面を四里ばかり行きて、神原といふ宿に留まりぬ。遙かに聞かざりし波の音、ただ枕の下に聞ゆ。

〔春の深山路〕

……波の枕をそばだてて聞くも悲しきころなり。

〔とはすがたり〕

「とはすがたり」の引用部は、旅に出た二条の須磨の浦での感慨である。秋の須磨という季節と場所、「枕をそばだてて」という表現から、「源氏物語」を踏まえていると見られる。他三つの紀行作品は、いずれも宿泊時の描写である。『東関紀行』には「枕」

という語は無く、波が「身のうへにかかるやうに」と、直接的な表現をしている。また、『信生法師日記』や『東関紀行』には、波の音のためによく眠れなかった様子が記されている。それぞれやや差異はあるが、波を聴覚で捉え、比喩でその近さを表すのは、中世の知識人に好まれた表現方法であるのかもしれない。『十六夜日記』の表現も、その系譜に属すると言える。

また、『東関紀行』の興津の浦、『十六夜日記』の清見潟、『春の深山路』の神原（蒲原）は、さほど離れた場所ではない上に、それぞれ海に近い宿所に泊つた際の記述²¹でもある。そういった地理的な条件に、清見潟が、「むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみもたたぬひぞなき」〔詞花和歌集〕恋上・二二三・平祐季）に代表されるように、歌に詠み込む景物として「波」の印象の強い場所であることが重なり、波の音に關して記したのだと思われる。

さて、『十六夜日記』の表現に、「海近き里」に宿つた際の実感と、清見が関における詠歌の伝統に加えて、『源氏物語』の影響を認めて良いのか、考えていく。『十六夜日記』の地の文を見れば、「風いと荒れて」とある。これは、須磨巻での「風」に通じよう。また、地の文の「夜もすがら風いと荒れて」と和歌の「寢覚」という語からは、一晚中荒れた風と波の音に、阿仏尼が眠りを妨げられがちであった様子が浮かぶ。そこには、「独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふ」という源氏の姿を重ねる

ことができる。『とはずがたり』以外の作品に比べると、『源氏物語』を想起させる要素が散見されるのである。かなり意識的に『源氏物語』を重ねるように記しているように感じられる。

また、阿仏尼の著書『うたたね』に、まさに右に引いた『源氏物語』を踏まえた叙述があるのには注意したい。

海いと近ければ、湊の波こ、もとに聞えて……荒磯の波の音も、枕の下に落ち来る響きには、心ならずも夢の通路絶え果ぬべし。

遠江へ下った女主人公の、住居の描写の一部である。この海辺の住まいでは波の音が非常に近くに聞こえる。夜には枕許に寄せてくるかのように、夢が覚めてしまうほど、という。ここの叙述で用いている「荒磯の波」と、『十六夜日記』の歌七句「荒磯波」が通じる。この語の選振は、『うたたね』で『源氏物語』を引いた際の描写を意識したものと考えられよう。なお、『うたたね』の描写は遠江国のもので、『十六夜日記』とは地理的にかなり隔たっている。『うたたね』と『十六夜日記』で、近似した表現を同一の場所で行うことを避けたのだろう。

さらに、これまで指摘はされていないが、俊成に次の歌があることは看過できない。

浦づたふいそとまやのかち枕ききもならはぬ浪の音かな
（『久安百首』八九四、『長秋詠藻』九一、『宝物集』二五五、

『千載和歌集』鶴旅歌・五一五、『正風体抄』一七）

この歌は、『源氏物語』明石巻で、源氏が紫上に贈った歌「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」や、須磨・明石巻における源氏の流離をイメージしたものと考えられている。俊成歌下句「ききもならはぬ浪の音かな」に、「ならずよ……荒磯波の……」と詠んだ阿仏尼の歌は似寄るものがある。この俊成詠も、阿仏尼の念頭にあったのではないか。

『十六夜日記』の地の文に、『源氏物語』が想起される語句や表現が多いこと、『うたたね』で『源氏物語』を取り入れた際に用いた語句が見られること、さらに、『源氏物語』を本説とした俊成の歌との語句の類似性が認められることから、『十六夜日記』当該部分は『源氏物語』を摂取しているという武田氏の主張に賛同したい。

⑥ おりたつ田子の

最後に見るのは、「田子の浦」を訪れた阿仏尼が、和歌を詠む場面である。従来の説の検証の後、私見を示したい。

今日は、日いとうらかにて、田子の浦に打ち出づ。海人ど

もの漁するを見ても、

心から下り立つ田子のあま衣干さぬ恨みも人にかこつな
とぞ言はまほしき。

ここの和歌は、『源氏物語』葵巻における六条御息所の歌が本歌だというのが定説である。

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづから
ぞ憂き

六条御息所の歌は、葵上の懷妊後、源氏との関係に懊悩する御息所が源氏に贈ったものである。「下り立つ」には「織り裁つ」が掛けられ、これは「袖」と縁語関係にある。また、「こひぢ」には「恋路」と「泥（こひぢ）」が掛けられている。更に、「みづから」は「自ら」と「水」の掛詞である。「ぬるる」「泥」「田子」「水」が縁語関係だと考えられる。そして「田子」には「農夫」という意味がある。御息所は、泥まみれの農夫に自分を重ね、苦しむことを分かっているながらも、源氏との恋愛から抜け出せない我が身を切に嘆く。

この歌は、室町期に成立した『源氏物語』古注釈書の『細流抄』において、「此物語第一の歌云々」と評されている。また、定家撰『物語二百番歌合』や、鎌倉中期末に成立したと推定される『源

氏物語歌合』にも採入されている。²⁰ 六条御息所の詠歌の中でも特に評価が高く、よく知られていた歌と言つて良いだろう。

さて、阿仏尼の歌を見る。「下り立つ」には「織り裁つ」を掛けており、「衣」、「干さぬ」と縁語関係である。また、「恨み」は「浦見」との掛詞で、「田子」「あま（海人）」の縁語となっている。さらに、「あま」には「尼」が掛けられ、「心から下り立つ」のは阿仏尼自身であることが暗示される。

阿仏尼の歌と六条御息所の歌では、「下り立つ田子の」の句が共通する。そして、「下り立つ」に掛けられた「織り裁つ」の縁語として、阿仏尼の歌では「あま衣」、「干さぬ」、六条御息所の歌では「袖」がある。この趣向も通じる。また、阿仏尼は「心から下り立つ田子のあま（尼）衣」といい、六条御息所は「下り立つ田子のみづからぞ」といっているから、「下り立つ」のは「あま（海人）」や「田子」に寓意された詠者自身という点も同じである。そして、「下り立つ」のは、「あま衣干さぬ恨み」、「袖ぬるるこひぢ（泥）」という語句から、衣の袖が濡れる場所、すなわち涙の乾かぬ場所という、詠者にとつての苦境であることが読み取れる。武田氏は、

この二首の内容は、自分から選んだ道ではあるがつらい思いをしている、という身の上を嘆いている点で、共通しているのである。

と述べる。以上、阿仏尼の歌は、技巧上の点でも、詠み出された内容の点でも、六条御息所の歌とよく結びつくのである。本歌取ということに異論の余地はない。

しかし、歌の内容をよく見ると、武田氏の述べる所に留まらなように感じられる。六条御息所の歌は、絶望的な恋に溺れる我が身を「憂き」とする嘆きで締め括られている。他方、阿仏尼は、「干さぬ恨みも人にかこつな」と詠む。自分から苦境に立つことを選んだのだから、誰にも文句を言うべきではない、と言うのだ。つまり、阿仏尼の歌は、身の不遇を嘆きながらも、それを耐え忍ばんとする心情を詠んでいる。その点で、御息所の痛切な哀歌とは趣を異にしていると言える。

阿仏尼は、六条御息所の著名な歌を本歌に据え、その語句や技巧等を取り込みながらも、詠み出した心情は別である。我が身を嘆きながら悲劇的な運命を辿りしかなかった御息所とは違うのだ、という、一種の宣言のようにも感じられる。

三 まとめ

こうして見ると、『十六夜日記』において、『源氏物語』の面影は決して薄くはない。むしろ、『海道記』や『東関紀行』に比べ、²¹『十六夜日記』には『源氏物語』の影が濃いとさえ言える。阿仏尼の『源氏物語』への関心の高さや、造詣の深さがよく感じ

られる。

①「いさよふ月」や、⑥「おりたつ田子の」で考察した部分は、自らの表現にはつきりと『源氏物語』の語句や言い回しを織り込みながらも、その模倣に終わるのではなく、物語世界から離れて事実を描写したり、自分の立場を表明したりしている。また、②「枕の塵」、③「月の都」、⑤「波ただ枕に立ち騒ぐ」の部分のように、『源氏物語』の下敷きとなった古典や、『源氏物語』から影響を受けている作品をも意識し、詠作や叙述をしている箇所もある。阿仏尼は、『源氏物語』に関わりのある作品についても関心が高く、よく承知していたのだろう。そして、それらを自身の文章に積極的に取り入れようとしているようである。さらに、④「さしかへる、ひまもなし」の部分は、『源氏物語』橋姫巻の特定の歌のみならず、その歌とは少し離れた場所の記述をも、自らの文章に、和歌に、非常に周到に組み込んでいる。摂取の方法や、文章構成や詠歌に、阿仏尼の技量がうかがわれよう。

特に目を引かれるのは、『源氏物語』を明確に引いている①の叙述、⑥の和歌が、典拠となった夕顔や六条御息所とは逆の姿勢を取っていることである。阿仏尼は、『源氏物語』を中心に、他の物語や歌等を、時には複合的に何度も引用しているが、それはその世界に自身を投影するためだけではない。時には、己の立場、使命感、意思等を、古典の表現を利用して主張しているのである。阿仏尼は、冷静かつ客観的に自分や現実を見つめながら、綿密な

計算の下で『十六夜日記』を著しているように感じられる。

テキスト

・『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『狭衣物語』、『建礼門院右京大夫集』、『信生法師日記』、『東関紀行』、『とはすがたり』、『十六夜日記』、『春の深山路』の本文及び和歌、歌番号、章段番号は、新編日本古典文学全集に拠る。

・『うたたね』は、新日本古典文学大系に拠る。

・藤原定家の歌は、テキストを佐藤恒雄『藤原為家全歌集』（風間書房、二〇〇二年三月）に拠り、同書における歌番号を『為家全歌集』として示す。

・藤原定家の歌は、久保田淳『藤原定家全歌集』に拠り、同書における歌番号を『定家全歌集』として示す。

・『為家御集』は私家集大成に拠る。それ以外の勅撰和歌集、私撰集、私家集は、新編国歌大観に拠る。

・『細流抄』は、伊井春樹編『細流抄・内閣文庫本』（桜楓社、一九七五年一月）に拠る。

注

- 1 田淵句美子『阿仏尼』（人物叢書 吉川弘文館、二〇〇九年十二月）。
- 2 岩佐美代子『「乳母のふみ」考』（『宮廷女流文学読解考 中世編』笠間書院、一九九九年三月）。
- 3 森本元子『十六夜日記・夜の鶴 全訳注』（講談社、一九七九年三月）。

三月）。以下、森本氏の論の引用は全て同書に拠る。

4 『伊勢物語』第九段冒頭「むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり」。

5 三河接になった文屋康秀が、小野小町を視察に誘ったところ、「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」と歌を返した故事。『古今和歌集』（雑歌下・九三八）詞書等に見える。

6 注4参照。

7 岩佐美代子校注・訳『十六夜日記』（新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』）。

8 武田孝『十六夜日記詳講』（明治書院、一九八五年九月）。以下、武田氏の論の引用は全て同書に拠る。

9 福田秀一校注『十六夜日記』（新日本古典文学大系『中世日記紀行集』）。

10 源氏の手習には、「長恨歌」の詩句「鶯鶯瓦冷霜華重 翡翠衾寒誰与共」（第七・七二句）に基づいた詞、「旧き枕故き衾、誰と共に」、「霜華白し」が書き付けられていた。古く流布していた「長恨歌」本文では、「翡翠衾寒」が「旧枕故衾」となっており、源氏の手習「旧き枕故き衾、誰と共に」は、その古い本文に拠っている。また、「霜華白し」は、「霜華重」を改めて用いたものである。前者に「亡き魂ぞ」の歌が、後者に「君なくて」の歌が添えられた。

11 久保田淳『建礼門院右京大夫評釈』（『国文学』学燈社、一九六八年一月—一九七一年三月）の、一九六九年八月号で当該歌の解

説がされている。先掲の狭衣詠を、長恨歌の一節「旧枕故衾」に基づく源氏詠の「二番煎じ」とし、右京大夫の詠歌が「これらを承けていることは、ほぼ確かであろう。」という。

12

右京大夫には、尊円という法師の兄がいた。尊円は『尊卑分脈』によると伊行の子だが、彼の『新勅撰和歌集』入集歌（雑歌二・一一九二）の詞書に「ちちの千載集えらび侍りし時」とあり、勅撰作者部類でも「皇太后宮大夫俊成子」と記されていることから、本位田重美氏は、尊円は右京大夫の母・夕霧と俊成との間に生まれ、両親離婚の後、夕霧の連れ子として伊行のもとへ来たのではないかと推察する。そして氏は、承安三（一二七三）年に出仕したと考えられる右京大夫の召名が、当時の俊成の官職名と一致しているのは、前述の縁より、彼女が俊成の養女として宮仕えを始めたからではないかとする（『評註建礼門院右京大夫集全釈改訂版』武蔵野書院、一九七六年七月）。ただし、この説に対して、糸賀きみ江氏（新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』）、久保田淳氏（新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集』）は、慎重な姿勢を取る。これ以外でも、右京大夫の恋人の一人として印象深い藤原隆信は、定家の異父兄であるなどの関わりがある。

『建礼門院右京大夫集』跋文に記述がある。「老いのち、民部卿定家の歌を集むることありとて、「書置きたる物や」と尋ねられたるだにも、人数に思ひ出でて言はれたるなさけ、ありがたく覚ゆるに……」。

14

新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集』第百四十九段。

15

田辺麻友美「『安嘉門院四条五百首』攷——『十六夜日記』との関わりを中心に——」（『和歌文学研究』第七十五号、一九九七年

二月）。

16

奥津春雄「月の都——紫式部の『竹取物語』撰取の方法——」（『国文学研究』第四十三号、一九七一年一月）。

17

注5の和歌。

18

佐藤恒雄校注『中院詠草』（新日本古典文学大系『中世和歌集鎌倉編』）。

19

同年六月、左大将であつた藤原良経の命により、定家は、歌頭に「いろは」の各字を置いて詠んだ「伊呂波四十七首」を速詠した。その詠草を見た藤原家隆が、それに和して送つて来たものに対し、定家が更に詠じた四十七首の内、「いろは」の「さ」を賦したものが、「さしかへる」の歌である。

20

「よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし」。

21

『東関紀行』には「海にむかひたる家に宿りてとまりたれば」、「十六夜日記」には「海近き里にとどまりぬ」、「春の深山路」には「海面を四里ばかり行きて、神原といふ宿に留まりぬ」とある。

22

片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系、井上宗雄校注・訳『正風体抄』）（新編日本古典文学全集『中世和歌集』）。

23

いずれも新編国歌大観所収。

24

新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』において、『海道記』には「源氏物語」撰取の指摘が無く、『東関紀行』は二箇所である。

（たまき なつめ 岡山大学大学院社会文化科学研究科）